



地域のつながりで避難者を支える取り組みを

パルシステム埼玉の職員も双葉町の方から料理のコツを教えてもらっています(写真中央・高田則夫さん)。

埼玉県には、東京電力福島第一原子力発電所事故の影響で、多くの方が避難しています。

被災者のふだんのくらしを取り戻すにはまだ時間がかかりますが、イベントや発行物を通して、新たな地域のつながりが生まれています。



「双葉町民の心を支える」 「社協と生協と地域のサロン」

2014年11月20日、埼玉県加須市の双葉町社会福祉協議会(以下、双葉町社協)加須事務所「いきいきサポートセンター」で「社協と生協と地域のサロン」(以下、サロン)が開催されました。このサロンは東京電力福島第一原子力発電所事故後に加須市に避難している双葉町民の皆さんが交流できる場所をつくらうと、双葉町社協の加須事務所で、月に1回、コープみらい(本部・埼玉県)とパルシステム埼玉が共に運営しています。

会場では、エコクラフトのかごづくりやミシン教室、編み物などのサークルの集まりもありました。趣味のサークルは双葉町民の皆さんが旧埼玉県立騎西高校に避難していたころから継続して取り組んでいるものです。この日も昼食までの時間、熱心にエコクラフトのかごづくりに励んでいました。

「昼食は、双葉町の方々と一緒に作ります。皆さんの故郷の味を再現できるように食材の切り方や味付けを教えていただけるので、私たちも福島の味を勉強できて楽しいんです」と話すのは、コープみらい

のパート職員で、埼玉県ユニセフ協会の事務局でもある金子千春さん。提供する昼食の食材は、コープみらい・コープ北本店で調達。参加者の皆さんから「みんなで食べる芋煮汁はおいしい」「ふるさとの料理を食べながら交流できるのは、やっぱりうれしいし、気持ちが上がります」といった声が上がります。デザートにはパルシステムのヨーグルトが提供され、「震災前は私もこれを食べていたのよ」と話す方もいました。

少しでもほっとできる居場所づくりを

サロンが終わった後、昼食づくりを担当したメンバーが集まり、次のサロンで提供する昼食メニューや、その作り方を話し合いました。町民の皆さんに喜んでいただけるよう、12月のサロンでは双葉町のお正



エコクラフトのかごづくり。時間を忘れて取り組んでいます。



お手伝いに来てくれたコープみらいの組合員に、町民の方から手編みの品のプレゼント。



芋煮汁やおにぎり、町民の方の差し入れのお漬物、パルシステムのヨーグルトなどを食べながら歓談しました(写真右端・コープみらい 金子千春さん)。

月料理に挑戦するといえます。

パルシステム埼玉・組織運営部まちづくり・福祉推進課の高田則夫さんは、「皆さんが旧城西高校に避難されていたころは、JAGグループさいたま、加須市婦人会、コープみらいと一緒に毎週木曜日に炊き出しを行なっていました。それまではコープみらいとは、あまり交流もありませんでしたが、同じ埼玉県の生協として力を合わせようということになったのです」と話します。

双葉町社協は、双葉町民の皆さんが地域との関わりを持つことができる、という意味で、避難先である埼玉県の生協と協同でサロンを継続している意義は大きいと考えています。

サロンの参加者を見送った後、双葉町社協の渡辺ゆかりさんは、「震災で大変な思いをした方々がふだんのくらしのちょっとした悩みや出来事を安心して話せる場をつくることのできれば、と思っています」と話していました。

地域のネットワークの中で 支援の輪をつなげる

福島県からの避難者が埼玉県に多い理由には、地縁や交通の便だけでなく、バラバラに避難してコミ

ニティーを崩壊させてはならないと、収容人数の多いさいたまスーパーアリーナを避難所として開放した埼玉県の方針もありました。この時に活躍した支援団体と避難者を今でもつないでいるのが、避難者に向けて発行されている「福玉便り」です。毎月、4,000部発行され、ボランティアや埼玉県内の各自治体からの郵送や、サロンや交流会を通して避難者の手に届けます。行政の支援制度の動向や、支援の取り組み内容、各地の生の声などを紹介し、サロンや集会といったイベントも告知しています。

双葉町社協、パルシステム埼玉とコープみらいが協同で行なうサロン以外にも、埼玉県内各地の施設で開催されるサロンにはその地域のコープみらいの組合員が運営に協力し、新しいコミュニティの仲間として避難者の方々を支えています。

11月2日にさいたまスーパーアリーナで開催された「コープみらいフェスタinスーパーアリーナ」での復興支援のエリアには、福島県との関係者も多く出展しました。

故郷に戻れない多くの避難者がいることを来場者に知ってもらいたい。そう考えたコープみらい埼玉県本部・参加とネットワーク推進室の



「コープみらいフェスタinスーパーアリーナ」での「ふくしまの夢、画用紙にのせて」の展示。絵本の出版社に打診したところ、快諾を得て企画が実現しました。



埼玉県内の避難者とさまざまな支援を結ぶ「福玉便り」。
<https://fukutama.wordpress.com/>

吉田隆宏さんは、「ふくしまの夢、画用紙にのせて」という絵本の展示コーナーを企画。福島に住む子どもたちが何を考えて、どんな希望を抱いているのか描かれた絵に、足を止めて見入る人の姿がありました。

このような催しは、地域の組合員に被災地の現状や支援の取り組みを知らせるだけでなく、支援団体同士の交流の場にもなっています。震災から間もなく4年。元の生活を取り戻す、または新しい生活を築き上げる取り組みは道半ばですが、発行者やイベントを通して、地域と地域、人と人が出会い、新しいつながりや思い出が生まれています。

自分の目で見て考える みやぎ生協の 被災地訪問企画

みやぎ生協では、2012年から組合員を対象に宮城県内の被災地を訪問するバスツアーを行なっています。14年11月4日、仙南・閑上地区を回る被災地訪問企画に同行し、参加した皆さんが感じたことや防災について考えたことを伺いました。

**被災した方の声を
直接聞くことができる**

みやぎ生協では、2012年から復興の状況を伝えるために組合員を対象にした被災地訪問企画を実施しています。訪



建設中の防潮堤で当時の様子について話す菅原さん(写真中央右)。

はなかなか聞くことができませ
ん。直接お話が聞ける、という理
由で参加されている組合員さん
が多いのだと思います」と話しま

す。みやぎ生協では、共同購入
(宅配)の請求書や広報誌
『RakuMe』の訪問企画を案内
していますが、定員40人に対し多
いときは100人を超える応募
があるといいます。

**被災地を訪れることで
自身の防災対策を振り返る**

参加者が巨理町の後に訪れた
閑上地区では、津波祈念資料館
の「閑上の記憶」で当時の映像を
見た後、閑上中学校や日和山公

園で犠牲になった方々に祈りをささげま
した。このバスツアーで訪れた仙南・閑上
地区は、メディアに取り上げられることも
少なく、他の地域と比べ復興があまり進
んでいません。

雑草で覆われた住宅地の跡を見つめて
いた参加者の一人は、これからどんな復興
の手伝いができるのか探したいと思い、今
回のバスツアーへの参加を決めたそうです。
「被害のあった地域を自分の目で見ると、
仮設住宅にお住まいの方への継続した支
援に取り組む必要性や、普段からの防災
対策について考えさせられます」と話して
いました。また、「震災がきっかけとなり、



閑上中学校で祈りをささげる参加者たち。

家に水や食料を備蓄していますが、気付
くと保存期限が切れてしまっていること
もあります。今回の企画に参加して、あ
らためていざという時に役立つ備えが重
要だと感じました」と防災への関心を持
ち続ける大切さを話す参加者もいまし
た。

被災地の復興に関する報道は年々減
り、時間の経過とともに震災への関心は
薄れつつあります。被災地の現状を学び、
自分が取り組める復興支援を考えたり、
ふだんのくらしの中で防災について振り返
ることが出来る取り組みを継続すること
が求められています。

※ 東日本大震災による大津波で甚大な被害を受けた巨理町の町民が、震災の記憶を後世に語り継ぐことで防災意識を持ってもらおうと立ち上げた会の名称。